

Title	在中日本ルーツの生徒における異文化接触に関する意識調査：上海日本人学校の事例から
Author(s)	小柴, 裕子
Citation	日本語・日本文化. 2019, 46, p. 97-113
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71688">https://doi.org/10.18910/71688</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究ノート>

## 在中日本ルーツの生徒における異文化接触に関する意識調査

—上海日本人学校の事例から—

小柴 裕子

### 1. はじめに

平成 28 年度の文部科学省の調査によると、日本語指導が必要な児童生徒数<sup>1)</sup>は 43,947 人となり、10 年前の調査に比べおよそ 1 万 2 千人増加している。また、平成 30 年度の外務省の調査によると、海外で生活する義務教育段階の日本人の児童生徒数も年々増加傾向にあり、平成 20 年度には 61,252 人であったが、平成 29 年度には 82,571 人となり、ついに 8 万人を超えた。日本と海外の間で国際移動する児童生徒数は、総じて増加傾向にあると言える。

一方、小柴(2017)<sup>2)</sup>の調査で、在日中国ルーツの児童生徒は、日本と中国の「文化スキーマ」が異なるため、友人とのコミュニケーションにおいて、言葉に隠された真意の汲み取りや状況の「察し」、また適切な距離感の確保に困難を感じたり戸惑ったりしている様子がうかがわれた。「文化スキーマ」とは、文化環境に合わせた神経回路網のことである(西田, 2007)。人は、属する文化の中から、考え方や価値観を得ていくが、異文化の中では文化環境が異なるため、それが違和感や困難につながりやすい。さらに、在日中国ルーツの児童生徒は学校以外の社会との関わりが極端に希薄であるため、在日期間が長くても、未だ日本について多くは「知らない」ことが明らかになった。

海外で生活する日本ルーツの児童生徒も同じような課題を抱えている可能性がある。国際移動する児童生徒が、どのように異文化と関わっているか、また「文化スキーマ」によってどのような違和感や困難を抱えているか、さらに年数による意識の変化があるかを調査することは、今後も増加傾向にある国際移動する児童生徒に関する研究の積み上げとして必要である。

このような経緯から、本研究では2018年に在中日本ルーツの生徒における異文化接触に関する意識調査を行った。中国・上海で生活する日本ルーツの生徒の異文化接触における「文化スキーマ」の傾向を考察し、本研究を多文化共生社会に関する研究の一助としたい。

## II. 上海日本人学校高等部について

上海日本人学校は、1975年総領事館内に上海補習学校として設立され、その後1987年に上海日本人学校として開校した。現在は、虹橋校（小学部）、浦東校（小学部・中学部・高等部）の3校種がある。そのうち高等部は、世界の日本人学校89校の中で唯一の高等学校となっている。

設立当初、高等部は設置されていなかったが、a) 家族の同帯率の高さ；b) 学力伸長；c) 企業の利点、を背景とし（井田, 2015）、「上海日本商工クラブ」と「学校運営委員会・上海HS（High School）プロジェクト委員会」の2つの主たる設置・運営母体による設立プロセスを経て、2011年4月に開校された。

本高等部では、外国語に関する特色として、1年次から3年次まで中国語を1コマ必修としている。また、自学の時間等を活用し、外国語の補習、論文作成、プレゼンテーションも行っている。さらにイベントとして、中国語関連では国際体験プログラムや現地校との中国語交流を実施し、英語関連では洋画のシーンを練習し、撮影まで行っている。

## III. 調査の概要と目的

アンケートとインタビューを通して、在中日本ルーツの各生徒がどのようなところで異文化接触を実感しているか、また異文化とどのように関わっているかを明らかにすることが、本調査の目的である。アンケートで異文化接触についての全般的な傾向を探り、インタビューでは、アンケートにおける回答の理由について重点的に質問した。

調査期間は2018年の7月から8月までの2ヶ月間である。調査対象は上海日本人学校高等部の生徒126人（1年生47人、2年生41人、3年生38人）である（資料1）。各クラスで授業内にアンケートを実施し、回収した。そのうち欠席者、

アンケート未提出者及び無記入の者（全てまたは半分以上が無記入）を除いた有効回答者数は、117人である。

上海日本人学校には、駐在家庭、国際結婚家庭、在日生活経験のある中国人家庭等、様々な家庭の生徒が在籍している。各家庭の背景は多岐にわたるため、彼らの中国滞在期間には非常に幅がある。そこで本調査では、滞在歴を初期、短期、中期、中長期、長期と分けるため、滞在期間1年未満の生徒、1～3年、4～6年、7～9年、10年以上と区切って、年数による意識の違いも分析する。

インタビュー参加者は、アンケートでインタビューの参加意志を表明し、且つ記名のあった者から、滞在期間と学年のバランスを考慮し、9人選出した（資料2）。

また、上海日本人学校の教員、上海日本人ボランティアグループ「互人多」において実施したインタビューも、分析、考察の参考に含める。

#### IV. 調査の結果と考察

生徒には、小柴(2017)の質問事項を参考とし、1.日本と中国で違うこと；2.コミュニティとの関わり；3.文化・行事について；4.中国語；5.中国に来て困ったこと・よかったこと、という5項目に関する13問の質問をした（資料3）。以下、各項目について、インタビューの結果も含めて分析、考察を行う。

##### 1. 日本と中国で違うこと

表1 日本と中国で違うこと（複数回答）

滞在年数	習慣	生活	価値観	友達	学校	道徳	なし	その他
1年未満	7	5	5	4	3	2	1	0
1～3年	26	23	20	7	9	10	1	0
4～6年	8	10	13	5	4	7	1	0
7～9年	10	9	7	1	5	4	1	0
10年以上	11	12	12	4	5	8	1	0
合計	62	59	57	21	26	31	5	0

（単位：人）

表1のように、日本人学校であることから、全体的に日本の教育に即したく学校>、及び大半が日本人である<友達>に対しては、違いを感じている生徒は少なかった。一方、<習慣>や<生活>、<価値観>に関しては日本と異なる文化環境から違いを感じている生徒が多かった。

理由として、滞在年数1年未満の生徒からは、「日本に慣れてきたから」「良いところも悪いところも含めて日本と違ったから」といった回答があった。<習慣>では、特に電車でのマナーに違いを感じていたようである。

滞在期間1～3年の生徒からは、「中国人の行動から価値観が違うと感じることがある」「日本と中国との他人との精神的距離を比べると、中国の方が距離が近い」といった回答があった。距離感に関しては、小柴(2017)の調査からも在日中国人家庭のインタビューの中で、「日本人のつきあいは水くさい」といった回答がある。中国と日本の双方から見て、改めて付き合い上の距離感や親密度における濃淡の差が明らかになった。

滞在期間4～6年の生徒からは、(中国は)「交通費が安い」「キャッシュレスが進んでいる」「積極的」「子どもにやさしい」「電車の中で電話で大声で話している」といった回答があった。電車に関する回答は、いずれの滞在年数の生徒からもよく挙げられている。

滞在期間7～9年の生徒からは「意見や考え方が根本的なところから食い違うことが多々あるから」「日本であたり前だったことは中国ではあたり前ではなかったりするから」といった回答がある一方、「日本も中国もあまり変わらない」「6歳から中国にいるから(変わらない)」といった回答もあった。

さらに10年以上になると「あまりわかりませんが、日本人と金銭感覚が違う気がする」「日本の記憶の方があまりないから」「ほとんど中国にいるから日本の印象が少ない」といった、日本の感覚から中国の感覚へと変化し、中国の方が身近となる逆転の現象が起きていることがわかった。酒井(2013)にも、「何年かして娘の頭が中国語化し始めちゃって」といった母親のコメントがある。それは「文化スキーマ」が文化環境により変化するためと言えよう。

## 2. コミュニティとの関わり

表2 日本社会のコミュニティ（おけいこ、友達、近所つきあい等）との関わり

滞在年数	ある	少しある	あまりない	全然ない	合計
1年未満	7	2	1	0	10
1～3年	26	11	5	1	43
4～6年	8	10	3	0	21
7～9年	8	4	3	1	16
10年以上	12	10	4	1	27
合計	61	37	16	3	117

(単位：人)

表2のように、日本社会のコミュニティとの関わりは<ある><少しある>が大半となっている。日本人学校という環境から、日本社会のコミュニティとの関わりは比較的強い。日本人学校小学部・中学部では、スクールバスや保護者同伴での通学が義務化されていたため、そのまま高等部に進学した生徒たちは、特に中国社会の中で隔離されていたと言える。

表3 中国社会のコミュニティ（おけいこ、友達、近所つきあい等）との関わり

滞在年数	ある	少しある	あまりない	全然ない	合計
1年未満	2	2	4	2	10
1～3年	10	15	10	8	43
4～6年	6	8	4	3	21
7～9年	7	5	2	2	16
10年以上	11	12	4	0	27
合計	36	42	24	15	117

(単位：人)

表3のように、日本人学校という日本社会の中にあっても、多くの生徒たちは中国社会のコミュニティとの関わりについて<ある><少しある>ことがわかった。理由として、「英語と中国語教室」「ボランティア」「チャリティーバザー」「クラスメイト（中国ルーツの生徒）」といった関わりが出てきた。

「ボランティア」や「チャリティーバザー」に関しては、学校と上海日本人ボランティアグループ「互人多」の活動とのつながりであることがわかった。「互人多」代表の進士氏によると、2011年の東北大震災をきっかけに、バザーに高校生もボランティアとして参加するようになった。高校生は、当日の販売やゲームを担当している。バザーに来る客の4割は、現地中国人や華僑、シンガポール人などであるため、生徒たちは中国語を使って、商品やゲームについて説明し、販売を行っている。このような活動は、生徒にとって地域への貢献に加え、さまざまな国の人々と中国語で触れ合う機会にもなり、且つボランティア活動として「ボランティア証明書」が発行されるため、進学関連の推薦の際にも活用できるものである。また、「互人多」のメンバーは駐在員の妻で構成されているため、男子生徒が力仕事を手伝ってくれたり、若い人たちの参加で活気が出て、子どもたちがより親しみを持ってくれたりと、「互人多」としても助かっていることから、学校と地域コミュニティとの連携から得る双方のメリットは大きい。

### 3. 文化・行事について

表4 日本の文化・行事について

滞在年数	知っている	少し知っている	あまり知らない	全然知らない	合計
1年未満	9	1	0	0	10
1～3年	28	15	0	0	43
4～6年	12	9	0	0	21
7～9年	9	7	0	0	16
10年以上	17	8	2	0	27
合計	75	40	2	0	117

(単位：人)

表4のように、日本人学校であることから、生徒の大半が日本人家庭であり、学校でも日本の文化・行事に即した学校行事を行っているため、大半が<知っている>を選択している。一方、<少し知っている>の選択が多く見られたことは、海外に来て改めて日本の文化を考えた際、実は自信を持って<知っている>と言い切れない自分に気がついたことによるのではないかと考えられる。

表5 中国の文化・行事について

滞在年数	知っている	少し知っている	あまり知らない	全然知らない	合計
1年未満	0	4	6	0	10
1～3年	5	19	16	3	43
4～6年	2	14	5	0	21
7～9年	11	3	2	0	16
10年以上	15	9	3	0	27
合計	33	49	32	3	117

(単位: 人)

表5のように、生徒たちは、日本の文化・行事に関する知識より、中国の文化・行事に関する知識の方が薄いようである。同校教務部長の河内先生によると、「中国文化に関する行事は行っておりませんが、現地校との交流や中国語研修で現地の大学（華東師範大学）へ通う等の中国の学校との交流はあります」ということであった。研修や交流を通して、中国に関する知識に触れる機会を取り入れているが、中国では春節といった大きな行事も家庭内で親族が集り、各家庭で行われていることから、行事の詳細は体験していないためにわかりにくいと言える。以上の事情から、中国の親族を持たない日本人家庭の生徒の自己評価は、低くなっているようである。

表6 家の行事について

中国にいる時間	日本の行事	中国の行事	両方	その他	合計
1年未満	8	0	1	1	10
1～3年	30	0	12	1	43
4～6年	11	1	7	2	21
7～9年	4	4	7	1	16
10年以上	3	3	21	0	27
合計	56	8	48	5	117

(単位: 人)

表6のように、滞在年数の浅い生徒は＜日本の行事＞の選択が多数であるが、

年数が長くなると＜両方＞という選択が増加していき、10年以上の生徒では＜両方＞の選択の方が多数となる。

＜日本の行事＞を選択している理由としては、「日本人だから」「日本にずっと住んでいたから」といった回答があった。また、「以前韓国にもいたため、日本人なら日本の文化を守るべきと思うため」といった海外生活を通して、アイデンティティを強く感じるケースもあった。

＜両方＞を選択している理由としては、「自分が生まれた国の行事と今住んでいる国の行事をどちらも楽しめれば、どちらの国にも親しみを持てるから」「お正月を2回祝うとお年玉が2倍になるから」といった回答があった。国際結婚家庭の生徒も＜両方＞を選択しているケースが多かった。また、中国ではお正月行事は盛んであるが、クリスマスの行事はまだ一般的とは言えず、その際は日本風に行事を行ったりという使い分けもあるようである。

＜中国の行事＞を選択している理由としては、「中国人の祖母と暮らし、日本人の父はよく出張するため」といった回答があった。＜その他＞には、その他の国の外国人家庭の生徒による「その他の国の行事」と、国際結婚家庭の生徒による「どちらの行事もしない」という回答があった。

#### 4. 中国語

表7 中国語が話せるか

滞在年数	話せる	少し話せる	あまり話せない	全然話せない	合計
1年未満	0	1	2	7	10
1～3年	1	8	28	6	43
4～6年	4	8	8	1	21
7～9年	10	4	2	0	16
10年以上	19	5	1	2	27
合計	34	26	41	16	117

(単位：人)

同校校長の宮川先生から、上海という立地を活かし、外国語に力を入れているというお話をうかがった。外国語の主な取り組みは前述のとおりであるが、同校

教員小黒先生によると、さらに体育祭も日本語と中国語のダブル放送とのことであった。

以上のような積極的な取り組みから、同校で7年中国語を教えている潘先生によると、最も早い生徒で中国に来て9ヶ月でHSK（漢語水平考試<sup>3)</sup>）4級に合格し、さらに、各学年の3割程度は6級に合格しているということであった。

ただし、表7より、滞在年数が長くともくあまり話せない<全然話せない>と自己評価をする生徒もいる。どうしてそのように感じるのか、また何が障害となっているのか、彼らの<話せない>と感じる理由にも留意する必要があると思われる。

表8 中国語を勉強したいか

滞在年数	思う	少し思う	あまり思わない	全然思わない	合計
1年未満	5	5	0	0	10
1～3年	21	16	4	2	43
4～6年	8	9	2	2	21
7～9年	8	5	3	0	16
10年以上	10	9	5	3	27
合計	52	44	14	7	117

(単位：人)

表8のように、滞在年数10年以上の生徒からは、もう十分中国語ができることからくあまり思わない<全然思わない>といった回答がある。一方、滞在年数10年以上でありながら、前項で中国語が<全然話せない>を選択していた2人の生徒は、中国語の勉強をしたいとく全然思わない<少し思う>を選択し、依然消極的な姿勢が見られた。

全体的には、「将来役に立つ」等の理由から、中国語学習にメリットを感じ、積極的な生徒が多かった。実際、上海日本人学校では、12の協力大学に推薦枠があるため、語学力は推薦の際にも有利になる。

## 5. 中国に来て困ったこと・よかったこと

表9 困ったこと（自由記述のまとめ）

滞在年数	中国語	生活習慣	環境	情報	価値観	その他	特になし・無記入
1年未満	7	1	1	0	0	0	2
1～3年	24	12	1	2	1	2	3
4～6年	5	7	1	3	0	0	7
7～9年	5	5	0	1	1	0	7
10年以上	4	1	1	4	1	0	10
合計	45	26	4	10	3	2	29

(単位：人)

表9のように、＜中国語＞で困っている生徒は、滞在年数が長くなっても一定数いることがわかる。これは、大田(1996, 2000)がCummins(1989)のBICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) とCALP (Cognitive Academic Language Proficiency) を「社会生活言語」「学習思考言語」と訳し、生活で使う言語能力と学習で使う言語能力に違いがあることを説いているように、「日常的な会話をする」ことはできても、論理的に「書く」「議論する」能力は別次元であることによると言える。したがって、自己評価からは、「社会生活言語」で困っている段階、また「学習思考言語」で困っている段階、というように滞在年数が長い生徒も、やはり言葉の問題を抱えていると考えられる。「学習思考言語」の習得に時間がかかることは、在日中国ルーツの児童生徒に対しての調査からも確認されている（小柴, 2017）。

＜生活習慣＞や＜環境＞は、表1で前述した違和感そのまま困難となっているケースが見られた。＜情報＞は中国の政治的理由から、インターネットの規制があること、また本や教科書なども関税がかかり高額になるため、なかなか手に入りにくいことが挙げられる。

なお、表9と表10については、自由記述の回答に名前をつけて分類し、それに当てはまる人数を表に記入している。

表10 よかったこと(自由記述のまとめ)

滞在年数	異文化体験・視野の広がり	日本・中国のよさを知る	生活習慣	中国語	その他	特になし・無記入
1年未満	4	2	1	0	0	2
1～3年	12	8	11	5	2	4
4～6年	7	2	4	2	4	4
7～9年	4	1	3	3	2	2
10年以上	9	1	4	1	2	7
合計	36	14	23	11	10	19

(単位:人)

表10のように、滞在年数に関わらず、〈異文化体験・視野の広がり〉を選択する生徒が多数であった。理由としては、「日本では経験できない貴重な体験がたくさんできた」「異文化と触れて考え方が変わった」等のコメントがあった。

〈日本・中国のよさを知る〉では、海外に出て日本のよさを知ると共に、「中国のイメージがいいものになった」「中国の人たちは実はやさしいことを知れた」といった中国のよさについて述べていた。

〈生活習慣〉では、料理のおいしさや値段の安さについて述べていた。滞在年数が長くなると〈中国語〉が上手になっていくことを実感する生徒もいた。〈その他〉では、「自由に生きれるようになった」「自分を主張しやすくなった気がする。声を大きく出せるようになった。小さいことを気にしなくなった」といった性格の変化について述べている回答が多かった。

生徒たちは、自ら進んで中国に移ってきたわけではないが、悪いところばかりを見るのではなく、良いところにもよく目を向けていることがわかった。

## V. まとめ

- 1) 滞在年数が長くなると、文化環境により「文化スキーマ」は変化することが確認できた。
- 2) 日本人学校という日本人社会の中にあっても、学校の取り組みにより、生徒たちは、中国社会のコミュニティと関わりがあった。学校と地域コミュニ

ティとの連携から得るメリットは大きい。

- 3) 家庭内の行事に関して、滞在年数1年未満では<日本の行事>を行うが、滞在年数が長くなるにつれ、<両方>の行事を行う家庭が多くなる。
- 4) 滞在年数に関わらず、生徒たちはそれぞれの段階で、中国語の習得に困難を感じている。しかしながら、学校の取り組みにより、高レベルの中国語能力に達する生徒も多数いる。
- 5) 滞在年数に関わらず、異文化体験を肯定的に捉えている生徒が多かった。

## VI. おわりに

本調査より、異文化である中国で生活する日本ルーツの生徒がどのようなところに日中の違いや困難を感じているか、また異文化とどのように関わっているかが明らかになった。

上海は、世界でも有数の国際都市である。国際都市は、ニューヨークも東京も同じとも称される。しかし、上海で生活する日本人生徒も、やはり「文化スキーマ」の違いから、<生活>や<習慣>、<価値観>に多く違いを感じていた。また、滞在年数が長くなると、文化環境により「文化スキーマ」に変化が見られることも確認した。生徒が感じる違和感の多くは、在日中国ルーツの児童生徒が述べていたこと（小柴, 2017）をもう一方から述べており、結局は同じことを述べていることがわかった。その中で、象徴的なキーワードとしては、人間関係の親密度における「濃淡」である。それは、人と人との距離感とも言えようか。在中日本ルーツの生徒が感じた中国人の精神的距離の近さは、「言いたいことをはっきり言う」「フレンドリー」といった言葉で表現され、日本人の距離感とは違うため、戸惑うことが多いようだ。

したがって、「アジアの国についての誤解は文化が類似しているためか、日本の枠組みと同様に考えることでの文化の読み誤りによる失敗の事例が多い」（岩崎, 2007）というように、日本と中国は歴史文化の関係が深い「一衣帯水」でありながら、やはり身近なコミュニケーションにも違いがあり、それが文化摩擦の一要因となりうることを、私達は自覚すべきである。

また、滞在年数が長くても、やはりそれぞれの段階で、中国語の習得が困難に

感じると意識されていた。「学習思考言語」に時間がかかるのは、前述のとおりである。

しかし、上海日本人学校では、「在外」という立地を活かし、外国語習得に力を入れて取り組んでいるため、中国語の上達を実感し、自信を得た生徒も多いようだった。さらに、日本人生徒が予想以上に中国社会のコミュニティとの関わりを持っていることがわかった。特に「互人多」等のボランティアグループと連携し、社会と接する機会は、生徒にとって非常に有意義な活動と思われる。

以上のような異文化接触を経て、「考え方が変わった」「自由になった」「中国語に興味を持った」といった前向きな変化について述べている生徒の声が印象的であった。そこには、「滞在する国と日本の政治・経済などの相対的な力関係が、海外で暮らす日本人に少なからず影響を与える」(岩崎, 2007)とされる中で、中国に住むメリットを生徒が自覚していることが表れているようである。

今後、本論文で得た成果を次につなげて、どのような体験・経験が「文化スキーマ」形成につながるか、違和感や困難を感じるきっかけや解決に至った際の糸口等個別ケースから精査し、研究の精度を高めていきたい。

## 謝 辞

アンケートとインタビュー実施にあたり、上海日本人学校高等部の宮川隆史校長先生、武一彦事務局長、河内晋太郎教務部長、上田菜穂子先生、相宅政則先生、福田健志朗先生、小黒綾先生、潘静先生、ボランティアグループ「互人多」代表の進士薫氏はじめ「互人多」の方々には多大なるご協力を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

勉強やクラブ活動に忙しい中、貴重な時間を割いてアンケートとインタビューに答えてくださった生徒の皆様にも深謝致します。

また、本研究の遂行にあたり、もと神戸大学大学院経済学研究科准教授の前田裕子先生(日本語ボランティアグループ「CoCoCara」理事)には、激励と共に多くの貴重なご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 「日本語指導が必要な児童生徒」とは、1. 日本語で日常会話が十分にできない者及び2. 日常会話はできて、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている者で、日本語指導が必要な者を指す。
- 2) 小柴裕子（2017）「在日中国人家庭における文化摩擦の意識調査」『神戸国際大学紀要』第93号。兵庫県在住の在日中国人6家庭親6人子9人に対して調査を行った。
- 3) 中国政府教育部が主催する中国政府認定の資格。6段階に分かれており、6級が最上級である。

## 参考文献・参考サイト

- 井田頼子（2015）「上海日本人学校高等部におけるトランスナショナルな進路選択—アジアの国際化と日本の大学入試が生徒に及ぼす影響—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻、pp.53-54.
- 大阪教育大学社会学研究会（2017）『海外日本人学校—教育環境の多様化と変容—』金壽堂出版.
- 太田晴雄（1996）「日本語教育と母語教育—ニューカマーの外国人の子どもの教育課題」『外国人労働者から市民へ—地域社会の視点と課題から』有斐閣.
- 太田晴雄（2000）『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 小柴裕子（2017）「在日中国人家庭における文化摩擦の意識調査」『神戸国際大学紀要』第93号、pp.83-92.
- 酒井千恵（2013）「上海の多文化家族 中国人配偶者と上海で暮らす日本人女性を中心に」『関西大学社会学部紀要』第45号（1）、p.65.
- 相良憲昭・岩崎久美子編（2007）『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、p.225.
- 西田ひろ子（2007）『米国、中国進出日系企業における異文化コミュニケーション』風間書房.
- 西田ひろ子（2008）『グローバル社会における異文化コミュニケーション』風間書房.
- Cummins,J（1984）Bilingualism and Special Education, Multilingual Matters.
- 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成28年度）」（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/1386753.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm)）（2018年3月27日アクセス）
- 文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査—用語の解説」（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/nihongo/yougo/1266526.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongo/yougo/1266526.htm)）（2018年3月27日アクセス）
- 文部科学省「海外で学ぶ日本の子どもたち—我が国の海外子女教育の現状—（平成28年

度)」([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/001.htm)) (2018年9月10日アクセス)

外務省領事局政策課「海外在留邦人数調査統計(平成30年要約版)」

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf>) (2018年11月1日アクセス)

HSK日本実施委員会「HSK中国語検定」

(<http://www.hskj.jp/>) (2018年9月10日アクセス)

#### 資料1 アンケート調査参加者のプロフィール

##### 1) 生まれたところ

中国にいる時間	日本	中国・台湾	その他	不明	合計
1年未満	8	0	1	1	10
1～3年	37	0	1	5	43
4～6年	15	0	0	6	21
7～9年	12	4	0	0	16
10年以上	19	6	0	2	27
合計	91	10	2	14	117

##### 2) 国籍

中国にいる時間	日本	中国・台湾	その他	不明	合計
1年未満	10	0	0	0	10
1～3年	38	1	0	4	43
4～6年	13	2	0	6	21
7～9年	12	4	0	0	16
10年以上	22	4	0	2	27
合計	95	11	0	12	117



## **A Survey on Intercultural Contacts of Japanese Roots Students Living in China:**

From the Case of Japanese School in Shanghai

Yuko KOSHIBA

The number of children who move between Japan and abroad tends to increase every year.

However, a survey, conducted by Koshiba in 2017, confirmed that differences in "culture schema" pose difficulties for children of Chinese origin living in Japan when communicating with friends. In addition, even though they have lived in Japan for a long time, they do not know much about Japan because they have virtually no opportunity to have social relationships outside of school.

In view of this result, I conducted a survey of intercultural contacts of Japanese roots students living in China at the Japanese School in Shanghai and confirmed that children there experience the same difficulties as those of Chinese origin living in Japan. However, some approaches made by the school in Shanghai have linked these children to the local community. In addition, I observed positive effects gained by students through intercultural contacts.

This report shows how Japanese roots students living in China contact with different culture, and what kinds of feeling of diffidence and difficulties they have by "culture schema" ,and moreover, how changes in awareness occur through the years in this way.